



城

第七十二回

福山城

～破天荒武将・水野勝成が築いた近世最後の大城郭～

深草 祐一

福山城は、新幹線駅の目の前に天守閣を見ることができ、城として有名です。空襲で焼失したものを鉄筋コンクリート造りで復興したのですが、築城400年を迎えた令和4年に、令和の大普請と呼ばれる改修が行われました。また、福山城を築いた水野勝成は、名将言行録において、倫魁不羈（あまりに凄すぎて誰にも縛ることができない）と評され、その破天荒な人生で知られています。

最後の近世城郭

福山城が完成し幕府に届けが出されたのが1622年。既に武家諸法度により新規築城が禁止されていた中で、五層の天守のほか三重櫓を7基も有する大規模な城郭を築いたのは、徳川家康の従兄弟にあたる戦国武将、水野勝成です。西国外様大名の監視の役割を期待されてこの地に転封となった勝成は、それまで備後の中心であった神戸城を廃し、より海と西国街道に近い土地に新たな城を築くことを幕府から認められます。築城にあたっては、廃城とした神戸城や幕府から下賜された伏見城の建築材を多く用い、非常に短期間のうちに、10万石の大名としては破格の大規模城郭を築きました。低い山を削平した本丸を中心に、二の丸、三の丸、そして城下を囲む総構えが構築され、本丸、二の丸の櫓の多さは全国有数です。南側の城下町は干潟を干拓して開かれたといい、海から城下まで運河がつながっていました。しかし、低湿地であったことから工事は困難を極めたようで、芦田川を城の北側の吉津川に分流しようとしたものの水害により中止になっています。天下泰平が定まってきた頃だったからか、この本丸北側は出丸的な地形の天神山および小丸山との間を上水道や堀切で分断した程度で、石垣や堀は設けられず、江戸時代を通じて竹冊により仕切ら



黒い面が鉄板張り

れただけであったといいます。こうした北側の防御能力を補うためだったのか、天守北面には一面に黒い鉄板が張られました。昭和の天守復興時にはこの鉄板張りは再現されていませんでしたが、令和の大普請で、この鉄板張りが復元され、福山城の特徴を際立たせています。

破天荒！ 水野勝成

水野勝成は、徳川家康の母、於大の方の弟である水野忠重の息子です。若い頃から血気盛んで、武田勝頼に奪われた高天神城の奪還戦において初陣し、翌年の第二次高天神城の戦いでは、16歳にして首級をあげ、感状を与えられています。その後も勝成は、武田氏を滅亡させた甲斐侵攻、本能寺の変の後に北条氏と旧武田領を争った天正壬午の乱、羽柴秀吉と織田信雄・徳川家康連合軍が戦った小牧・長久手の戦いに参加し、いずれの戦でも先陣を切って突入し武功をあげていきました。しかし、侍大将としてはあまりに無鉄砲な戦いぶりで勝手な振る舞いも多く、ある事件をきっかけに激怒した父から勘当されてしまいました。そして、他家への仕官もさせないようにする「奉公構え」の措置もとられてしまったため、勝成は縁者の下を転々としたり、京の町で無頼の者どもと交わって喧嘩騒ぎをおこしたりと、荒れた日々を過ごします。やがて豊臣秀吉と和睦した織田信雄の招きで豊臣傘下に加わり、雑費攻め、四国征伐に参加して武功をあげますが、何が気に入らなかったのか、出奔してしまいました。この時は怒った秀吉から刺客を放たれたという話もあるようです。しばらく中国地方を転々としていたようですが、肥後で佐々成政に召し抱えられ、肥後国衆一揆の鎮圧戦では一番槍をつける活躍をしています。しかし、この一揆の責任で佐々成政が切腹させられると、主君を失った勝成は、豊前の黒田官兵衛のところに仕官し、ここでも豊前国衆一揆の鎮圧戦で、黒田家中の勇士、後藤又兵衛と競って武功をあげたといいます。ところが、豊臣秀吉との謁見に向かう黒田長政に伴われて船で瀬戸内海を渡っている途中で突然出奔。九州に戻って肥後の小西行長に仕え、天草の反乱鎮圧で活躍するも、また出

奔。次は加藤清正、その次は立花宗茂に仕官しては、これも何か気に入らなかつたらしく短期間で出奔してしまいました。その後は数年に及ぶ流浪の日々を経て、備中国の三村氏の食客となり、そこで世話役の娘との間に子をもうけていて、この子が後に、故郷近くの福山藩で第二代藩主となりますが、それはまだ先の話。さて、さらに数年後、豊臣秀吉が亡くなり、豊臣政権内部で権力争いが起き始めた頃、勝成は単身上洛し、徳川家康のはからいで父と和解しました。しかし、関ヶ原の戦いへと向かう東西両軍の謀の中で、父が殺害されてしまいます。そこで、家康の命で急遽勝成が刈谷3万石の跡目を相続し、水野勢を率いることになりました。大垣城の抑えを命じられた勝成は、関ヶ原での勝敗が決した後、内応を誘って大垣城を開城させています。戦後、かつて仕えた小西行長が石田三成、安国寺恵瓊とともに堺の町を引き回されている時、勝成が編み笠を被せてやったという話が残っています。こうして、流浪の身から一転、刈谷城主として徳川家康の側近の一人となった水野勝成は、従五位下に叙任され「日向守」を名乗ります。日向守は、かつて明智光秀が名乗ったもので、誰も欲しがらなかつたのですが、勝成は笑い飛ばしてむしろ欲したと言われており、以後、「鬼日向」とも呼ばれるようになりました。そして、大坂夏の陣では、大和口方面の実質的な総大将を任せられます。この時、家康は勝成に対し、総大将なのだから昔のように先頭に立って戦わないように、と厳しく命じたといひます。しかし、いわゆる道明寺口の戦いで、旧知の後藤又兵衛の軍勢と相対すると、またも自ら一番槍をつける突撃を行って、後藤隊を壊滅させました。そして、大坂城下の戦いでは、真田隊が決死の突撃を敢行し家康の本陣へ攻め込んだ際、手勢を引き連れて敵の後方を遮断し、勢いを失わせたところで他の部隊とともに三方から攻め掛かって真田隊を壊滅させています。また、別働隊の明石隊に突き崩されていた味方を押しとどめ、明石隊も撃退したといひます。このように、戦働きで大活躍を見せた勝成でしたが、家康の言いつけを聞かず先陣を切ったためか、加増は3万石にとどまり、大和郡山6万石への転封となりました。しかし、その4年後、福島正則が城の無断修築を咎められ改易されたのに伴い、勝成に同情的だったと言われる二代將軍徳川秀忠の命により、備後へ10万石で加増転封となって、福山城を築城することになったのでした。なお、大坂の陣から23年後、75歳の水野勝成は、島原の乱の鎮圧軍に参陣しています。勝成が到着した頃には、既に籠城する一揆勢の限界が迫っており、戦況を見て取った「鬼日向」の提案により

総攻撃が実行された結果、ついに原城は落城したとされています。

その後の福山城

水野勝成は、流浪時代の経験と人脈を活かして福山で先進的な政治を行い、新田開発や産業振興も積極的に行いました。後に、水野氏は5代藩主の早世により無嗣除封となり、福山は幕府の天領となりましたが、この時の検地で、実質5万石増の石高があったことが分かりました。その後、福山に10万石で入った阿部氏は、5万石分の余裕を召し上げられた状態で、表高10万石の藩政を維持しなければならず、重税を課されることになった領民の間では、最初の藩主水野勝成がいっそう慕われることになったようです。

さて、この阿部氏といえば、幕末に、若くして老中首座となり日米和親条約を締結した阿部正弘を輩出した譜代大名です。正弘は、この難局にあたり、全国の大名に意見を提出させたり、勝海舟の登用など能力重視の人事を行ったりして幕政の改革に取組みましたが、反対派に配慮して老中首座を退いた後、心労のためか早世してしまいました。その後、時代は急転し、王政復古によって、福山城は新政府軍（長州軍）に攻められることとなります。この時、新政府軍は福山城の弱点の北側から侵入し、小丸山の奪取を巡って激しい戦闘が行われました。しかし、本格攻撃の前に恭順が認められ福山城は戦火から免れたのでした。

令和の大普請

太平洋戦争の福山大空襲により福山城の多くの建物が焼失してしまい、三の丸には鉄道駅が造られて市街地化しましたが、二の丸内の石垣は残り、昭和41年に天守、月見櫓、御湯殿が復興されました。天守を鉄筋コンクリート造りで復興した際に、朱塗りの欄干や2つの火灯窓など少々外観が盛られていたのですが、令和の大普請により、北面の鉄板張りとともに、焼失前の外観を取り戻す改修が施され、内部の展示等も最新設備にリニューアルされました。天守最上階からは、疾走する新幹線が見下ろせます。是非訪れてみてください。



福山駅前夜景